

ミツバの作型と根株養成

北海道専門技術員 餘 助 良 二

ミツバは日本の各地に自生し、古くから栽培されていたが消費が限られていた。

しかし最近では食生活が向上して、一般家庭でも年中消費されるようになり栽培面積は増加している。

1 作 型

北海道で栽培するミツバにはいろいろつくり方がある、出荷する荷姿、出荷時期によってつぎのような作型がある。

(1) 切りミツバ (軟化ミツバ)

6月下旬に種を播き、根株を養成し、秋に根株を掘り取り、冬季にハウス・温室に根株を伏せ込んで、軟化栽培をするもので、軟化には高度な技術を要し、収穫・調整に多くの労力がかかるが、価格は高く、農閑期の栽培としては有利な作型である。

(2) 刈りミツバ

切りミツバと同じ時期に種を播いて、根株を養成し、秋には根株を掘り取らずに、そのままにしておき、翌春、萌芽して茎葉が伸びたものを鎌で

刈って売のを刈りミツバと言っている。

この刈りミツバでも近年市場へ早く出荷するためにハウス・トンネルを被覆して栽培する面積が増加しつつある。

刈りミツバは出荷の方法が切りミツバのように茎葉をきちんと揃えなくてよいので、収穫・調整の労力は少なくてもよい。

(3) 根ミツバ

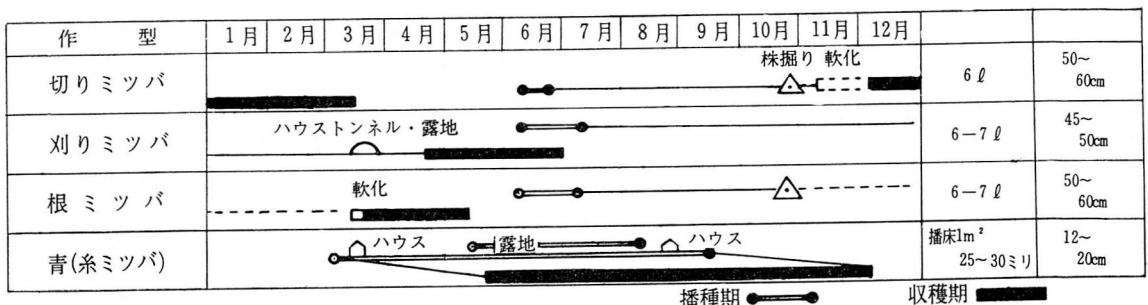
切りミツバと同様に種を播き、秋に根株を掘り取り、翌春に軟化しやすいように、秋のうちから軟化床に根株を伏せ込み、土寄せをして、そのまま越冬させ、翌春切りミツバの出荷が完了した4～5月ごろに出荷する。

それには3月ごろから軟化床の雪を除雪して、根株を伏せ込んだところに障子をかけて軟化栽培をする。

出荷するときには、切りミツバと違って、根を付けて収穫し、水でよく洗って根をつけたまま小束にして出荷するため、根ミツバといっている。

根ミツバは切りミツバのように軟化床に一度伏せ込んだ根株から、何回も収穫しないので、ミツ

第1図 ミツバの作型と栽培時期 (札幌)



第1表 昭和47年度札幌市中央卸売市場
におけるミツバの月別入荷量

月別	入 荷 数 量			道内産 1 kg 単 価
	道 外 産	道 内 産	計	
1	2,900 ^{kg}	13,999 ^{kg}	16,899 ^{kg}	436
2	1,904	13,750	15,654	351
3	1,870	37,475	39,345	258
4	1,045	68,968	70,013	187
5	417	104,653	105,070	94
6	536	35,842	36,378	111
7	392	15,294	15,686	150
8	312	16,502	16,814	133
9	442	15,250	15,692	175
10	1,045	13,210	14,255	230
11	2,375	5,520	7,895	671
12	3,173	18,868	22,041	792
計	16,411	359,331	375,742	212

バは香りが高く、茎が太く、質のよいものが穫れる。

根ミツバの栽培は技術的にもやさしく、軟化・収穫・調整などの労力も少なくすみ、野菜の最も不足する時期に出荷ができる。

(4) 青ミツバ(糸ミツバ)

栽培したいときに随時種を密播して、播種後40～60日たって、ミツバの茎丈が15～20cmぐらいに伸びたころ、根をつけたまま収穫し、小束にして出荷する。

栽培には特別な技術を要しないが、小束に結束するため収穫・調整に手間がかかる。

現在では経営面積の少ない都市近郊に栽培が多い。

露地栽培では5月から8月まで随時播種でき、ハウスを利用した栽培では、促成栽培の後作に7月下旬から9月中旬にかけ随時種を播き、10～11月にかけて出荷ができる。

北海道では以上のような作型があって、現在では年中消費されているので、これからは最も適した作型を導入し、収益の安定をはかることがたいせつである。

2 切りミツバ(軟化ミツバの栽培技術)

(1) 栽培適地

ミツバの充実したよい根株を培養するところは、耕土が深く、肥沃でしかも水排がよく、かん害の少ないところが適している。

切りミツバは6月に種を播き、根株を養成し、秋には根株を掘り取るので、栽培する畑は、根株の掘り取り作業がしやすく、ミツバがよく生育するところがよいので、栽培する畑は腐食含量の多い砂壤土・壤土・泥炭土などが適している。

粘土地でも発芽のときにさえ乾燥しないで、発芽さえすれば、秋までには立派なミツバに生育するが、根株の掘り取り作業が非常に困難で、手間がかかり過ぎてよくない。

(2) 品 種

軟化栽培に用いる品種は、白茎で少しぐらい早播きしても、抽苔のしない品種を用いる必要がある。

それには、道内で過去において栽培されたことがあって、優秀な系統から採種されたものを入手するようにする。

種子の必要量は10a当たり、6lぐらい準備すると十分である。

(3) 耕耘と施肥

ミツバは土壌が乾燥すると発芽が極端にわるくなるので、降雨後土壌が適度に湿っているときに播種するのが最もよく、耕耘・整地はていねいに行う必要がある。

ミツバは播種から掘り取りまでに130日内外かかるので、この期間に肥切れしないよう有機質肥料を多く施用する必要がある。

ミツバの根株の掘り取る10月下旬になっても茎葉が濃い色をしているようでは、軟化中のいたみが多く、よいものを獲ることができないので、施肥方法について検討する必要がある。

泥炭地で根株を養成すると根株の掘り取りころまで肥料が効き、葉の色が濃くなることが多いので、肥料が早く効くように心掛け、根株の充実を早めるように工夫する必要がある。

(4) 播 種

ミツバはあまり早く播種すると低温の影響を受

け、抽苔する株が多くなるので、札幌近郊では6月20日から25日ごろまでに播種する。

この時期よりも遅く播種すると、生育期間が短くなり、根株の収量が減少するから努めて適期に播種を行うことがたいせつである。

畦幅は普通45～50cmの広幅まきをする。播種量は10a当たり、6lを標準にして、ムラなく播種する。

ミツバの種子は発芽に好光性を示すので、覆土が厚かったり、播き溝が深く播種後、強い雨が降ったりすると発芽がわるくなるから、覆土は足またはレーキで軽く行いローラーでよく鎮圧する。

ミツバの発芽をよくするには、降雨後土壌が適度に湿っているときに播くようにして、日照りが続くときには覆土後に敷わらして乾燥を防止する。

(5) 除 草

ミツバは発芽するまでに2～3週間ぐらいかかり、発芽後の生長も遅いので雑草の多い畑では除草に多くの労力を要するので、一部の産地ではミツバの発芽する直前にミスト機に措置した火焰放射器を利用し、ミツバ畑に生えている雑草を火炎で焼却処理を行ってよい効果をあげている。

ミツバは火炎で焼却された後に発芽してくるので雑草に負けることがなくよい生育をする。

除草剤の使用については、第2表のようにミツバの生育期にCMMP(ダクロン乳剤45%)が使用できるので、ミツバ畑の雑草があまり大きならないうちに使用すると効果の高い除草剤です。

第2表 ミツバの除草剤使用基準

除草剤の種類	作用型	処理方法	使用時期	10a当り製品使用量
CMMP ダクロン乳 剤45%	非ホルモン型 接 触 型	生育期全 面雑草処 理	雑 草 1～2葉 期	500～ 800cc

注意事項 雑草が大きくなると効果が劣るので3cm以下のときがよい。

(6) 病害虫防除

ミツバは菌核病・べと病などが発生することがあるので注意する。

害虫では、ウリハムシモドキが発生し、成虫は生育虫のミツバの根際を加害し、ミツバを枯死さ

せることがある。

幼虫は主にミツバの葉を食害するので成虫、幼虫とも早期発見に努め、早めに防除を行う必要がある。

ミツバ畑の付近に牧草畑があったり、水田転換畑にミツバを作付したところにはウリハムシモドキの加害が多いから注意を要する。

(7) 根株の掘り取り

10月末になり、ミツバの葉に2回ぐらい強い霜が当たり、葉が黄化してくるので、10月末から11月上旬にかけて、晴天をみはからい根株を掘り取る。

掘り取り作業はかなりの手間はかかるが、できるだけミツバの根がたくさん着くように掘り起し、めんどろでも根に着いている土は完全によく振り落とし、根際をよく揃えて小束にしぼり、軟化するハウスの付近の屋外に深さ15～18cmの溝を掘り作り伏せしておく。

掘り取り後、根株を乾燥させたり、寒風にさらし、根を凍結させるとよくないので、できるだけ早く葉をつけたまま作り伏せを行い、茎葉の養分を根に移行させる。

切りミツバの軟化したものは主にクリスマス、正月ころに大量消費されるので、この時期に出荷できるように、11月20日前後を中心にハウスを用いて軟化栽培を行う。

(8) 軟 化 床

冬季積雪のあるときに耐雪性のある固定ハウスを利用して軟化栽培をする。

ハウス内に深さ60cm程度の軟化床をつくる。

ミツバの軟化には多量の灌水を使用するので軟化床の底には水がたまらないよう前もって排水をよくしておく。

軟化床の面積は、根株養成の良否により異なるが普通のできて、10a分の根株を軟化するのには30～40m²ぐらい必要である。

軟化床の加温には湯温または電熱を用いて軟化するが、電熱線・湯温パイプは床の外側に多く入れ、軟化床内の温度ができるだけ均一になるようにする。

(9) 伏 せ 込 み

出荷・販売しようとする約30日ぐらい前に軟

化床に伏せ込むが、秋に仮伏せしておいた根株を掘り出し、ミツバの古い茎葉を取り除き、根に着いている土はよく落とし、根もとをよく揃えて軟化床に直接伏せ込むか魚箱に詰めて軟化を行う。

根株に土が着いていると軟化中に根の通気性がわるく失敗することが多いので注意する必要がある。

つぎに根株の伏せ込む量、時期に差があると萌芽の揃いがわるくなるので、均一に萌芽するよう熟練した人で均一な作業を行うようにする。

(10) 温度管理

伏せ込み後、萌芽するまでの5日間ぐらいは23°C内外で管理し、その後ミツバの草丈が10 cmぐらいまでは18~20°C、その後は15°C前後で管理する。

ミツバの軟化は温度を高くすると菌核病、根ぐされ等が発生するので、軟化中の温度はいく分低目にして日数をかけて軟化をする。

灌水は毎朝行うが、軟化床の温度が低いときには温水をかけ、温度が高いときには毎日行う灌水量の加減によって温度調節をする。

ミツバの色づけは伏せ込み後10日目ころから徐々に行う。

ミツバの草丈が10 cmぐらい伸びたならば、日中はハウス内全体を暖房機で暖め、軟化床の障子はずしミツバに光線をできるだけ多く当て早くから葉に色を着けるようにする。

このように早くから葉に色着けをすると軟化中に病気にかかりにくく、日持のするミツバチが軟化できる。

伏せ込み後30日ぐらいで草丈が30 cmぐらいに伸びたところに収穫する。

札幌における選別は、株元についた黄変した葉、細く短い葉はすぐって、ゴム輪で50 gの小束にして20束をミツバ専用のダンボール箱に詰めて出荷する。

切りミツバはよい温度管理をすると2~3回収穫することができるが、最初の軟化のときに高温で軟化すると根がいたみ2回目の収量が著しく減少するので、必要以上の温度で軟化しないようにすることがたいせつである。

《ルポルタージュ》 上土幌大規模草地 を訪れて

——草地の現況について——

雪印種苗KK札幌研究農場

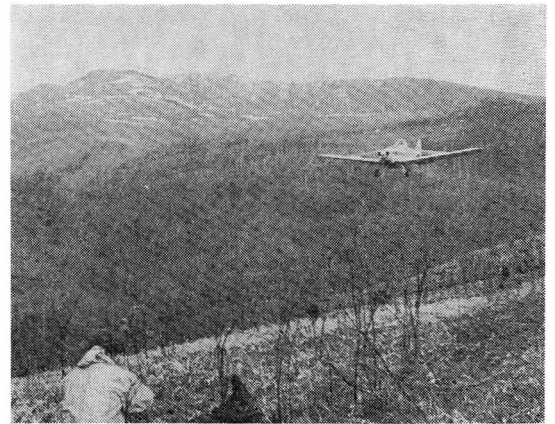
山下 太郎

昭和48年7月初旬、昨夜からの雨はあがっていたが、雨雲が低くたれこめ、大雪山系へ連なる上土幌(山岳)大規模草地は、基地周辺部をのぞいて霧にすっぽりとざされていた。

アルピニストの若き伊藤場長より、牧場の概要についてお話を伺い、草地を案内していただく。

霧の中でチョッパー収穫を行なっている大型機械のエンジン音が不気味にこだまする。詩的な静かなたたずまいを破るこのエンジンの音が適期収穫をしなければ良質牧草を生産・利用できないこと、更に良好草地として維持・管理するためには、天候はある程度無視しても作業を消化せねばならない大規模草地の草地マネジメントの難しさを象徴しているように思われた。

上土幌大規模草地は、昭和41年~47年に亘って北海道開発局が十勝中部地区国営大規模草地と



昭和41年、航空機による播種試験
(山岳草地であることと原植生がわかる)